

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	日本福祉大学	大学名	日本福祉大学
研究プロジェクト名	ヒューマンケアにおける重層的スーパービジョンのシステム構築		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

社会問題の困難性や多面性が増すことにより福祉現場での支援者が困惑・疲弊している現状を踏まえ、本研究では支援人材育成とその質を担保するスーパービジョン(以下SV)に着目する。様々な社会的支援の制度化・システム化が進む中で、SVを ①ヒューマンケアに従事する支援者を包括化すること(包括性・目的1)、②直接支援のマイクロ局面のみならず組織や地域における支援体制作りのメゾ局面までを含む重層的で持続的なシステム構築を視野に入れること(重層性・目的2)、③理論と実践の統合をめざしたSVの再定義、再理論化と「人材養成の支援者支援」への応用を進めること(統合性・目的3)、を通して、職種・専門性・組織・制度等を超えた開放型の新たなSV文化を支援現場に醸成することに寄与する。

研究は、①研究拠点として、スーパービジョン研究センター(大学院名古屋キャンパス)を立ち上げ、②5領域【A)理論基盤、B)ソーシャルワーク、C)ソーシャルケア、D)権利擁護支援、E)社会福祉法人マネジメント】の各研究グループにより分担し、統合をさせる。〔B)C)D)E)のマイクロ・メゾ領域の研究群をA)で集約・統合〕③学内外の研究者と各領域の実践者とが協働で活動に参加し実践と研究との融合を目指し、④既存の研究センター(権利擁護研究センターや地域ケア研究推進センター)との連携を確保する。

また①初期はグループごとにマイクロ・メゾ領域の各研究群による研究や研修プログラム開発を進め、かつ Kadushin の翻訳による知見を受け、SVの再定義や再理論化に向けた検討に着手する。②中期は理論と実践の統合を目指し、応用として研修のプログラム開発・評価およびSVシステム構築に対する検証を量的・質的な研究方法を開発しつつ取り組む。③最終年度では、センター全体として、開放型のSV文化の醸成に向けたシステム作りに着手する。また日本における支援人材の養成・開発に対して有効なSV理論と、持続可能な重層・開放型のSVシステムの構築に関する研究成果をまとめ発表し、広くヒューマンケアとしてSV文化の定着に貢献する。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

各グループはヒューマンケアの包括性を意識し、実践者や当事者の知を尊重しながら、主に事例や語りによる質的研究を行なった<包括性・目的1>。マイクロからメゾ範囲(重層性)の再理論化に寄与するための研究成果を各グループ別に生み出し、それらをもとに『福祉・介護の支援人材養成・開発論』(勁草書房)を出版した<重層性・目的2>。SV研究の第一人者である A.Kadushin の“Supervision in Social Work”5th(2014)を訳し(中央法規)、理論研究面からSVの再定義、再理論化に活かした(センター全体会を2ヶ月に1回)。また領域やグループを超えた新たなSVの再定義や再理論化、研究方法論の開発に関する枠組みを作成しつつあり、それに基づくSV研修プログラムを開発し、多様な支援者集団に対して研修を試行的に実施し評価を行なっている<統合性・目的3>。

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

**平成 26 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究進捗状況報告書**

- 1 学校法人名 日本福祉大学 2 大学名 日本福祉大学
- 3 研究組織名 スーパービジョン研究センター
- 4 プロジェクト所在地 名古屋市中区千代田 5-22-35 日本福祉大学名古屋キャンパス北館 7 階
- 5 研究プロジェクト名 ヒューマンケアにおける重層的スーパービジョンのシステム構築
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究
- 7 研究代表者
- | 研究代表者名 | 所属部局名 | 職名 |
|--------|--------|----|
| 田中 千枝子 | 社会福祉学部 | 教授 |
- 8 プロジェクト参加研究者数 35 名
- 9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会
- 10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
田中 千枝子	日本福祉大学 教授	Aグループ:SVの理論・研究方法	研究代表者・研究全体及びAグループ統括
石河 久美子	日本福祉大学 教授	①翻訳・文献研究から、SV の定義と理論の共通基盤を形成するとともに、仮説的に新たな SV 概念を提示する ②SV のマイクロ・メゾにおける研究方法論を検討し提示する ③各領域、マイクロ・メゾレベルでの研究成果を集約し融合させ、全体をまとめる	多文化ソーシャルワークにおけるSV理論研究
福山 和女	日本福祉大学 客員教授		ヒューマンケアにおけるSV理論研究
菱川 愛	東海大学准教授		児童虐待SWのSV理論研究
浅野 正嗣	金城学院大学 教授		保健・医療SWにおけるSVシステム研究
大谷 京子	日本福祉大学 准教授		Bグループ:ソーシャルワークのSV
山口 みほ	日本福祉大学 准教授	①ソーシャルワーク領域における SV の理論検討(スクールSW/異文化 SW 等含む) ②質的調査によるソーシャルワークSVスキルの抽出と、量的調査による実態・課題の把握 ③多職種連携を目指した、ヘテロ型SVのシステム構築にむけた検討	保健ソーシャルワークからのSV理論研究
野尻 紀恵	日本福祉大学 准教授		スクールソーシャルワークにおけるSV
青木 聖久	日本福祉大学 教授		PSWにおけるSV、ヘテロ型SVシステム検討

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

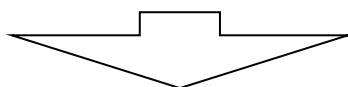
野村 豊子	日本福祉大学 教授	Cグループ:ソーシャルケア のSV ①ソーシャルケア領域にお けるSVの理論検討 ②認知症ケアにおけるSVの 方法に関する質的調査研究 ③都道府県・法人等を単位と したSVシステム普及の方法と 効果に関する検討	Cグループリーダー・Cグル ープ統括
北村 育子	日本福祉大学 助教		高齢者ケアにおけるSVの 方法に関する調査研究
来島 修志	日本福祉大学 教授		認知症ケアにおけるSVの 方法に関する調査研究
水谷 なおみ	日本福祉大学 准教授		障害者ケアにおけるSVと システム構築
鈴木 俊文	静岡県立短期 大学准教授		介護福祉領域のSVと組織・ 地域レベルのシステム研究
瀧澤 学	神奈川県リハビリテ ーション病院 MSW		高次脳機能障害支援に関する SVと組織・地域のシステム研究
湯原 悦子	日本福祉大学 准教授	Dグループ:権利擁護支援 のSV ①権利擁護領域におけるSV の理論検討 ②権利擁護支援におけるジ レンマの質的調査 ③権利擁護システムにお けるケース検討会の運営方法に 関する調査 ④権利擁護版倫理要綱の作 成とSVへの応用の検討	Dグループリーダー・Dグ ループ統括
平野 隆之	日本福祉大学 教授		地域福祉におけるSV、M レベルでのSV理論研究
金 圓景	筑紫女学園大 学講師		権利擁護支援のジレンマ調 査、システム構築とSV関係の 調査
佐藤 彰一	國學院大學教 授		権利擁護支援のジレンマ調 査、権利擁護版倫理要綱作 成
上田 晴男	特定非営利法人 PASS ネット理事長		権利擁護支援システムにお けるケース検討会運営の調査
小西 加保留	関西学院大学 教授		ソーシャルワークとしての権利擁護 支援とそのSVに関する検討
原田 正樹	日本福祉大学 教授	Eグループ:法人マネジメン トのSV ①法人マネジメント領域にお けるSVの理論検討 ②法人マネジメントにお けるジレンマ調査 ③法人マネジメントにお けるSVの文化醸成プロセスに 関する調査 ④スーパーバイザー養成 のモデル事業の実施	Eグループリーダー・Eグ ループ統括
奥田 佑子	日本福祉大学地 域ケア研究推進セ ンター研究員		法人マネジメントにお けるジレンマ調査、文化醸成 プロセスの調査
山内 哲也	社会福祉法人武 蔵野会本部次長		法人マネジメントにお けるジレンマ調査、文化醸成 プロセスの調査
(共同研究機関等)			

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 年 月 日)



法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	日本福祉大学准教授	横山 由香里	B 及び C グループ: スーパービジョンの効果研究
	石巻専修大学教授	照井 孫久	C グループ: 被災地のリーダーケアマネジャーのSV研究
	認知症介護・研修大府センター 研修指導員	山口 友佑	C グループ: 被災地のリーダーケアマネジャーのSV研究
	同朋大学講師	汲田 千賀子	C グループ: 認知症ケアのSV研究
	日本福祉大学助教	本間 萌	C グループ: 認知症ケアのSV研究
	中部学院大学講師	小松尾 京子	B グループ: ソーシャルワークのSV
	日本福祉大学助教	神林 ミユキ	B グループ: ソーシャルワークのSV
	関西国際大学教授	坂野 剛崇	A グループ: 質的研究によるSV手法の開発
	佛教大学講師	塩満 卓	A グループ: 質的研究によるSV手法の開発
	社会医療法人 居仁会 総合診療センターひなが PSW	宮越 裕治	A グループ: 質的研究によるSV手法の開発
	美作大学准教授	永見 芳子	A グループ: 地域に展開する実習SVの研究

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

社会問題の困難性や多面性が増すことにより福祉現場での支援者が困惑・疲弊している現状を踏まえ、本研究では支援人材養成と質を担保するスーパービジョン(以下SV)に着目する。支援の制度化・システム化が進む中で、新たなSVを ①ヒューマンケアに従事する支援者を包括化すること(包括性・目的1)、②直接支援のミクロ局面のみならず組織や地域における支援体制作りのメゾ局面までを含む重層的で持続的なシステム構築を視野に入れること(重層性・目的2)、③理論と実践との統合をめざしたSVの再定義、再理論化と「人材養成の支援者支援の方法論」への応用を進めること(統合性・目的3)を通して、職種・専門性・組織・制度等を超えた開放型の新たなSV文化を支援現場に醸成することに寄与する。

(2) 研究組織

①恒常的研究拠点として、スーパービジョン研究センター(日本福祉大学名古屋キャンパス)を立ち上げ ②5つの領域【A)理論基盤 B)ソーシャルワーク C)ソーシャルケア D)権利擁護支援 E)社会福祉法人マネジメント】の各研究グループにより分担し、統合させる[B)C)D)E)のミクロ・メゾ領域の研究群を A)で集約・統合]。③学内外の研究者と各領域の実践者とが参加し協働することで実践と研究との融合を目指し、さらに④既存の研究センター(権利擁護研究センターや地域ケア研究推進センター)間の連携を、各研究メンバーが研究会に参加することで確保し、コラボレーション研究として展開する。

(3) 研究施設・設備等

スーパービジョン研究センターは日本福祉大学名古屋キャンパス北館7階にあり、その他の権利擁護センターや地域ケア研究推進センターと会議室や教室、研究・研修・会議に必要な設備・機材、研究支援の事務機能をシェアすることにより、機能的に仕事を進めている。

またプログラム評価の一貫として研修用の教材作成についても、ICT サポートセンターの助力で円滑に実施がなされている。

(4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

< 現在までの進捗状況及び達成度 >

本プロジェクトでは、現状分野別領域別に行なわれているヒューマンケアの支援者支援の方法であるSVを、①包括性、②重層性、③理論と実践の統合性 をキーワードに、以下6点にわたって、進捗状況と研究成果を整理する。

包括性・目的1の進捗状況:

(1)ヒューマンケアを担う支援者の範囲の広がりや多様さに留意し、(2)SV関係がホモ型・ヘテロ型の組み合わせから、多職種連携、当事者や地域住民などによる非専門職である支援者など、徒弟的専門職養成を超えた第三局面へと展開している状況を把握しその課題を分析している。

重層性・目的2の進捗状況:

(3)各領域の直接支援場面のスキルやアセスメント、理論的・倫理的課題などのミクロレベル研究から、(4)持続可能なSV体制構築にいたるメゾレベル研究をも重層性・循環性をもって研究を包括している。

統合性・目的3の進捗状況:

(5)理論研究と実践研究の相互作用性と到達度を踏まえ、研修プログラムを産出しその評価を行ないつつある。(6)A.Kadushin の理論と日本の実際を踏まえ、『福祉・介護の支援人材養成・開発論』を著し、支援者支援の方法としてのSVの再定義、再理論化を提起しつつあり、最終的に開放型SV

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

文化の土壌を育成することに寄与していく。

【ヒューマンケアの包括性の進捗状況】

(1) ヒューマンケアを担う支援者の範囲の広さ・多様さについては、被災地の生活を支える非専門職である市民支援者(*図書 20)や、重度心身障害者など言語以外の感覚的コミュニケーションを重用する介護支援者(*論文 34)、認知症高齢者に対して回想法という手法を通じて支援を行なう多様な専門性を持つ支援者(*論文 36)、行政等の外部スーパーバイザーが施設へ向かうことでデリバリーSVを受け取る施設の生活支援者(*図書 7)、成年後見制度等の法的背景や枠組みを持ち、意思決定支援を目指す権利擁護支援者(*図書 12)、高次脳機能障がい者に対する長期にわたる地域支援者(*論文 5)などを対象として研究を進めた。結果、従来にはなかった立場、制度・環境にもとづく、新たな支援の内容を必要とされている支援者像が明確になった。またその業務負担は大きく、支援者支援であるSVを大いに必要としていた。

また専門職養成における学生に対する実習SVについても、SVの効果や体制評価について、実証的に現場の実践者と共に分析した(*論文2、*論文9)。さらにヒューマンケアを担う支援者の幅広さを包括したSVスキルとして、実践の振り返りが行われるが、その振り返りのスキルは質的研究法による言語収集・分析と類似点が多くあり、それらを援用できることから、質的研究法の分析スキルを研究している(*文献 11、*文献13、*文献 14)。

支援者支援の実際には、支援者が「自己の実践を自ら振り返る」「振り返った内容を仲間や指導者と共有し」「各々が理解するためのやり取りを経て」「支援者自身が納得し、エンパワメントされる」過程を踏むという、「自らの実践の省察」「仲間や上司との相互作用」という枠組みと、「社会に対するよい支援の保証と自分の納得」という目的を内蔵したSVの形を呈していた。

(2) SV関係におけるスーパーバイザー(以下バイザー)とスーパーバイジー(以下バイジー)の組み合わせが、専門性から見てホモ型なのか、ヘテロ型なのかで生じる諸問題は従来から論じられていた。それがいまや多職種連携チーム内のSVであるコンサルテーションの考え方の問題や、当事者や市民・隣人など非専門職が支援者として入る、ある意味専門性を軸としない第三局面のSVのあり方(*論文 3)に関するものへと展開している現状とそれらの課題を分析した。

A.Kadushin は世界で初めてSVを研究としてとらえた人で、現在に至るまでその第一人者として様々な研究成果をあげている(*図書 5)。とくに彼の唱えたSVが発揮する3機能(管理的・教育的・支持的機能)は有名であり、今でもそれを分析軸にしている研究は多い。そのKadushin は職場におけるSVの実態から、ヘテロ型や非専門職のSVを包含して考えており、3機能のうち管理的機能のみならず教育的機能も支持的機能も発揮できる可能性を示している。また、このことからバイジー・バイザー関係の再定義を考える上で、管理的機能は発揮されないとされてきたコンサルテーションを含めて、単なる職場での指導監督の上下関係でなく、仲間・同僚として水平的にも影響や関係を広げていくSV体制の、拡大や展開の方向性と課題がわかった。

【ミクロからメゾレベルにわたる重層性の進捗状況】

(3) ミクロレベルの支援者支援場面の研究は、とくにソーシャルワーク分野で進んでおり、SVにおける省察の内容については、実践理論の枠組みを押さえることと、倫理的姿勢を確認・論証することの重要性が、日本社会福祉士認定機構による、認定社会福祉士の教育研修プログラムの分析により示されている(*図書 1)。そこで、それを立証することを目的に、ベテランワーカーによるSV場面のアセスメン

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

トとその際のスキルを「語り」から抽出し、SVの理論的根拠を求めていく研究(*論文 45)を行い、バイザーはバイジーの成長状況のアセスメントをもとに、適切な時期を待って介入を行なうか否か判断をする、認知行動療法的アプローチを採用していることが分かった。

また、人-環境相互作用理論に基づいて、SVにおける、話し合いのやり取りが行なわれていることを、FKグリッドを用いて視覚的に検証する研究(*論文 2)では、相互作用としてダイナミックに人と環境のマイクロ・メゾ・マクロレベルを行き来する関心の焦点が広がっている効果を視覚化できた。またベテランワーカーによる困難事例への実践の振り返りとその語りから、倫理的な課題の発見とその解決のプロセスを明らかにしていくことを描いた研究(*[14.その他の研究成果等-『3.講義』])により、倫理的姿勢を最初に持ち、ジレンマ状況や価値観のずれを認識することの重要性がわかるなど、SVの理論と実践をつなぐ研究を行なっている。

(4) メゾレベルのSV体制の構築を目指した研究は、組織内と組織外との展開に分類できる。まず組織内のSV体制は、Kadushin が唱えるように上司-部下の関係性をもって職場づくりを進める方向性がある。近年では介護保険や生活困窮者自立支援などで、職場のバイザーとしての主任相談員が制度化された。しかし一方で人事評価権を持つ職場上司がバイザーとなることは、部下であるバイジーの専門的自律性を損なうとする弊害を唱える研究もある。

そこで人事考査のシステムを含みながら、法人レベルで組織内SV体制やシステムを構築している法人事例を分析した(*論文 47)。その社会福祉法人では、法人全体を新人職員から法人トップまでの上下および水平関係のグループにして、その組み合わせでSV体制をつくっていた。部下の実践を上司と部下とで振り返り、また上司どうし、部下どうしの同位職仲間の集団でも振り返る。そしてまた経営トップが自分の過去や現在の実践を、新人集団や中堅者集団に向けて振り返りつつ語りあう機会を設けるなど、SV構造をもって法人を組織化していることが分かった。さらに実践を振り返る省察の内容が、「隣人を愛する」という法人理念に照らしていることは、SVが倫理的姿勢を問うこととも合致していた。

また組織外SV体制の構築例として、ある地域の医療ソーシャルワーカーの集団が、お互いバイジーやバイザーとして成長することを目標に、SV体制を作っていくプロセスを分析した。ここでは職場の上司と部下(上下関係)によるSVの内容を、地域で集まる上司同士のグループ、部下同士のグループ(水平関係)において振り返り検討されていた。職場でのSV事例を、お互いがバイジーとなってグループで検討する関係と地域の仲間内のバイザー層、バイジー層の各グループの振り返り検討会を重層的に組み合わせていた。また新規のバイジーグループを、時期をずらして定期的にこのシステムに組み入れることで、バイジーがバイザーになっていく過程を支えるといった持続的システム構築を構想していた(*論文 16)。

【理論と実践の統合性に関する進捗状況】

(5) 理論研究と実践研究の相互作用性の成果は、新たなSVの方法論を定着させるように研修プログラムの産出に結実する。新たなSVの要素として重要であり、プログラム開発につながるものは、1) 支援者の性質が専門職から幅広い非専門職・准専門職に広がっていることにより、教育・教諭することではなく自ら分かっている過程を出現させる方法論をとるべきこと。2) 閉鎖的な徒弟制にもとづく上下の関係では終わらず、同僚や地域の仲間集団などの水平的な関係を組み合わせることが効果的であることから、グループを扱うための枠組みや知識・技術を含めてプログラム開発をするべきこと。3) 理論と実践を統合するには、理論を形にして実践で評価確認し、結果によって形を変えてさらに修正していく相互性に富むプログラム開発をすべきであり、より円滑に修正・再開発をするために具体的な形と

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

しての教材開発を行なうべきことがわかってきた。

1) については、非行から回復した当事者が、支援者に対して自らの非行体験を振り返り、それを支援者に語るような再非行防止プログラムを実施することで、当事者自らがセルフヘルプによってエンパワメントし、支援者はそれを傾聴し理解することで相互作用を起こす。そうした振り返りは当事者が支援者として参加する新しいSVの意味につながる。当事者の語りを中心とした研修プログラムを支援者に対し企画し実施することで、支援環境の変容につながったという報告を得た。(*図書8)

また 2) について、地域ケアシステム下での多職種・多機関による地域調整会議や地域ケア会議を多く開催することが必要とされている。その機会をグループSVとして実施するための研修を「ケア会議をスーパービジョンで行なう」としてプログラム開発を行なった。ここでは Kadushin がグループSVを扱う場合、バイザー以外のメンバーをバイザー役ではなく、メンバー自身の実践を振り返るバイザーの立場をとって参加させるという指摘に刺激を受けた。そうした知見を得て、ケア会議を単なる事例提供者を囲む検討会ではなく、SVとして実施するための枠組みを体験するプログラムを開発した。その際グループメンバーがバイザー体験を共有できるような司会・リーダーシップの発揮について、実践上明確化した(*[14.その他の研究成果等-『4-5.研修会』])。

3) については、SVは実践理論の枠組みで押さえる必要があるということから、実践理論について、SVの場で実践を通して上司であるバイザーがバイザーに説明できるようにすることを目的に、実践者と研究者とのコラボレーション研究として研修プログラム開発を行なった。プログラムでは研究者が特定の実践理論を教授した後、実践者が現場で生じる事態について、シナリオ作成とロールプレイ撮影に参加したビデオ教材を作成し映す。そして研修受講生がそのビデオ事例を、学んだ実践理論によって解説できるようにグループディスカッションを行ない、研究者がその成果を評価・解説するという研修プログラムを作成した。そこでは、参加者の評価をそのつど行なっており、難しいことを実践の事例を使いながら分かりやすく理解できたという評価を多く得ている(*[14.その他の研究成果等-『2.DVD 教材の作成』])。

(6) 各領域別の研究成果をもとに、新しい支援者支援としてのSVの再定義、再理論化を行いつつある。その1つは、Kadushin の翻訳において3機能の1つである administrative を、従来の定訳であった組織から人への一方向の“管理的機能”から、組織と人との間での相互作用として“運営管理機能”と訳し変えた。さらにSVの再定義に向けた『福祉介護の支援人材養成・開発論』(*図書6)において、日本ではとくに組織の枠組みを用いることが有効であることを踏まえて、SVで組織環境や風土を扱うことの重要性を強調し、管理的機能をマネジメント機能と、また教育的機能をプログラミング機能に置き換えて、バイザーへの直接介入(マイクロレベル)のみならず、組織への環境介入(メゾレベル)を強調し記述した。

またSVをメゾレベルに上げる鍵は、グループワークと、経時的・積み上げ方式および予測的な評価とにあるという Kadushin の主張を理解したうえで、その方法論を実施した成果を論文や研修プログラム評価に活かしていきたい。その成果は最終的にSV文化の土壌を育成することに寄与する研究になる。それが明確な研究と認められるように論文を量産し、知見を研修等で広めていきたい。

<特に優れた研究成果>

当センターの取り組みは、人材養成・開発における新たな支援者支援の再定義と方法論の再考の対象として、幅広い領域での多様な非専門職・准専門職に対しても、有効なSVを開発するための研究に優れている。同時に専門職の特徴である従来の徒弟的な上下関係を伴った指導から、SV体制を、

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

同僚や地域の仲間などとの水平関係の中でのグループを組み合わせるという、“メゾレベルのSV構造”を定着させるための持続的組織のあり方を提言できたことに意味があると考え。さらに実践と理論との統合研究の産物として、研修プログラムが開発され、それを実際に実施することによる評価まで行なう研究群の蓄積がなされ、厚みのある研究となっている。

<問題点とその克服方法>

先駆的实践を扱っているため、日本の今をあらわしているかどうかについて偏りが生じている可能性がある。今後はSVの制度化が進む中で、支援者支援を支援の専門性を育てる形で実施していくことが必要である。そのため一方的管理でなく、地域や組織に働きかけるメゾレベルの方向性も育つようにシステム開発に力を入れる。また成果としての研修評価は、受講生満足度以外は直接効果の対象になかなかつながらない。受講生が実践に戻った後までのフォローアップ調査が必要となり、継続的な研究拠点と研修システムを作っていくことも課題となる。

<研究成果の副次的効果 実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む>

理論研究と実践研究の相互作用により、SV研修の多様なプログラムを産出したことにより、様々な領域および地域から、SV手法を身につけるための研修会開催の要請が一挙に出てきた。またSV体制づくりに関してコンサルトをして欲しいという相談も増えてきた。そうした要望に応えるために、当センターが組織的に対応できるように検討中である。

<今後の研究方針>

各領域の研究成果を一般化、普遍化ができる様に、SVの構成要素を統合する方向性が求められる。また今後も新たに出てくる領域や対象や方法に対しても、開発したSV研修プログラムやSV方法論が応用できるように検討していきたい。

当センターをSV研究のプラットフォームとして、研究と実践理論、研究者と実践者が相互作用を起こし、当事者とも交差するオープンな研究セミナーの場をつくり、新たな支援者支援の方法としてのSVの理論を世に問うことを考えている。

<今後期待される研究成果>

人材養成・開発に関する有効な支援者支援方法としてのスーパービジョンを、ヒューマンケアの包括性を意識しながら、とくに支援として意思決定支援など後見人の支援SVに関する研修プログラムを開発し、研修の場を通して実践とつながる。

<自己評価の実施結果及び対応状況>

2ヶ月に一度開催されるセンター全体会において、各グループの進捗状況が報告され、その相互評価を行うとともに、年度毎に事業の計画・報告、予算計画が審議されている。

<外部（第三者）評価の実施結果及び対応状況>

大学が行う文部科学省の採択事業に対する「中間評価」を受ける。

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 人材養成・開発 (2) ヒューマンケア (3) ソーシャルワーク
 (4) ソーシャルケア (5) 権利擁護 (6) スーパービジョンシステム
 (7) 包括性 (8) 重層性

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)について記入してください(左記の各項目が網羅されていれば、項目の順序を入れ替えても可)。また、現在から発表年次順に遡り、通し番号を付してください。

- 1・神林ミユキ「スーパービジョンセッションにおいてスーパーバイザーが用いるスキル—ソーシャルワーカーによるスーパービジョンの質的調査—」『社会福祉学』, 印刷中
- 2・*佐原直之、福山和女、田中千枝子「FKグリッドによる実習スーパービジョンのプロセスにみる実践的効果に関する研究」日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』第12巻, 2017年3月
- 3・*田中千枝子、福山和女「支援人材養成・開発のスーパービジョン～包括性・重層性・統合性に焦点をあてて」『医療社会福祉研究』第25巻, (査読中)
- 4・湯原悦子「高齢者虐待の実態と家族介護者支援の重要性」『地域保健』48(2), 2017年3月
- 5・*瀧澤学「高次機能障害者の長期支援に関する研究」『医療社会福祉研究』第25巻, 2017年3月
- 6・塩満卓「相談支援専門員の利用者に対する14の援助者役割とその獲得機序(第二報)—知的障害者領域における相談支援専門員の円熟期を中心に—」『福祉社会開発研究』第12号, 2017年3月
- 7・湯原悦子「家族の介護問題と家族支援のあり方: ケアする人を支える」『月刊福祉』100(1) 2017年1月
- 8・小西加保留「2015年度学会回顧と展望: 保健医療部門」『社会福祉学』Vol.57-3, 2016年11月
- 9・*尾方欣也、福山和女、田中千枝子「実習スーパービジョンの効果と教育的アセスメントの関連性～教育的および支持的機能に焦点をあてて～」公益社団法人日本医療社会福祉協会『医療と福祉』No.100 Vol.50-1, 2016年9月
- 10・野尻紀恵・川島ゆり子「貧困の中に育つ子どもを支える連携支援プロセスの視覚化—スクールソーシャルワーカーとコミュニティソーシャルワーカーの学び合いプロセスを中心として—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』第26号, 2016年7月
- 11・*鈴木俊文「認知症ケアにおいて介護福祉士が経験している実践感覚の分析—実践感覚が導く「尊厳」の保持と阻害—」『介護福祉士』No.20・21, 2016年4月
- 12・*田中千枝子「生活困窮者への健康支援とその課題」『社会福祉研究』鉄道弘済会第125号, 2016年4月
- 13・*塩満卓「相談支援専門員の利用者に対する14の援助者役割とその獲得機序(第一報)—知的障害者領域における6名のベテラン相談支援専門員へのインタビューから」『福祉教育開発センター紀要』第13巻, 2016年3月
- 14・*坂野剛崇「初回面接における新人セラピストの役割遂行に関する一考察—3名の語りに対する質的記述的研究による分析から—」『関西国際大学心理臨床センター紀要』第9巻, 2016年3月
- 15・*福山和女・石田賢哉「介護老人福祉施設におけるスーパービジョンの意識化」『ルーテル学院研究紀要』第49号, pp1-11, 2016年3月
- 16・*浅野正嗣、山口みほ「保健・医療領域のソーシャルワーク・スーパービジョンの現状—スーパ

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

- ービジョン講座受講者の調査から」公益社団法人日本医療社会福祉協会『医療と福祉』No.99 Vol.49-2, pp64-73, (査読有), 2016年3月
- 17・平野隆之「地域福祉と地域ケア」『日本の地域福祉』第29巻, pp3-12, 2016年3月
- 18・*照井孫久「ケアリスクマネジメントの前提としてのリスク概念の考察」『石巻専修大学研究紀要』27号, pp49-55, 2016年3月
- 19・Yukari, Yokoyama "Relationships between social factors and physical activity among elderly survivors of the Great East Japan earthquake: across-sectional study" Bio Med Central, 2016.1
- 20・金圓景「介護からケアへ：ソーシャルワーカーによる認知症ケア」『筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要』第11号, pp141-151, 2016年1月
- 21・Yukari, Yokoyama "Application of the eight-item modified medical outcomes study social support survey in Japan: a national representative cross-sectional study" *Quality of Life Research*, springer, 2015.10
- 22・*湯原悦子、小島佳子、高柳雅仁「地域における権利擁護支援ニーズの内容と支援の効果—法人後見の受任事例からの考察—」『日本福祉大学社会福祉論集』第133号, pp29-46, 2015年9月
- 23・北村育子・永田千鶴「地域包括支援センターによる認知症高齢者の在宅生活継続支援：専門職間の連携に着目して」『日本福祉大学社会福祉論集』第133号, pp1-16, 2015年9月
- 24・青木聖久「障害年金における受給継続と就労との関係—精神障害を有する本人と家族からのアンケート調査を通して—」『日本福祉大学社会福祉論集』第133号, pp47-73, 2015年9月
- 25・福山和女「超高齢化社会と家族支援」『家族療法研究抄録集』第32巻2号, pp94-96, 2015年8月
- 26・永田千鶴、松本佳代、北村育子 他「認知症疾患医療センターが担う在宅支援：独自の支援と地域包括支援センターとの連携による支援内容の分析」山口大学医学会『山口医学』64巻3号, pp183-190, 2015年8月
- 27・*大谷京子「アセスメント面接に対するクライアント評価の探求—面接ロールプレイ分析—」『精神保健福祉学』3(1), pp35-48, 2015年7月
- 28・*山口みほ、前田美都里、嶋田和寛、野田智子「愛知県下のMSW管理職による管理業務の現状と課題—管理業務研修のグループ・セッションの分析から—」愛知県医療ソーシャルワーカー協会『医療ソーシャルワーク』第64巻103号, pp70-78, 2015年5月
- 29・水谷なおみ「障害者就業・生活支援センターの機能類型に関する研究—運営主体の事業特性とのかかわりから—」『日本介護福祉学会：介護福祉学』Vol.22 No.1, pp15-26, 2015年4月
- 30・坂野剛崇「対人援助職の実習教育・スーパーヴィジョンに関する一考察—ソーシャルワーク・心理臨床領域の先行研究を踏まえて—」『関西国際大学カウンセリング研究所紀要』第3巻, 2015年3月
- 31・*照井孫久「ケアのリスクマネジメントにおける方法論の研究」『石巻専修大学研究紀要』第26号, pp37-45, 2015年3月
- 32・*奥田佑子、平野隆之、金圓景「地域における権利擁護支援システムの要素と形成プロセス」『日本地域福祉学会』第28号, pp1-13, (査読有), 2015年3月
- 33・青木聖久「精神障害者の障害年金における認定審査の現状と課題—障害年金に精通した3名の社会保険労務士の語りを通して—」『日本福祉大学社会福祉論集』第132号, pp1-20, 2015年3月
- 34・*鈴木俊文「介護職員の「経験や勘に基づく実践」の分析—「嫌がる感じ」という「だいたいの目安」—」『日本認知症ケア学会誌』Vol13-4, pp781-789, (査読有), 2015年1月
- 35・金圓景、奥田佑子「認知症高齢者グループホーム管理者の主な業務内容および抱える困難」『日本認知症ケア学会』13-4, pp739-748, (査読有), 2015年1月
- 36・*来島 修志「事例検討会の進め方と意義」『認知症ケア事例ジャーナル』第7巻3号, pp.311-316, 2014年12月
- 37・*福山和女「2013年度学界回顧と展望—ソーシャルワーク部門」『社会福祉学』第55巻3号, pp142-156, (査読有), 2014年11月

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

- 38・福山和女「新しいタイプの協働における夫婦・親子の尊厳について—遷延性意識障害患者へのソーシャルワーク」『精神療法』第40巻5号, pp702-703, (査読有), 2014年10月
- 39・*太谷京子「ソーシャルワークアセスメントスキル—面接ロールプレイを用いた質的分析—」『ソーシャルワーク研究』40(3), pp48-57, 2014年10月
- 40・金圓景「地域包括ケアシステムの構築背景と推進方向」『韓国長期療養学会(韓国)』2, pp5-32, (査読有), 2014年8月
- 41・野尻紀恵「福祉教育の当事者としての子ども—子どもの生活課題を視野にいれて—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』第23号, pp16-26, 2014年7月
- 42・*石河久美子「在住外国人の現状と支援の課題—多文化ソーシャルワークの普及に向けて」鉄道弘済会『社会福祉研究』第120号, pp54-61, (査読有), 2014年7月
- 43・永田千鶴、北村育子「地域包括ケア体制下でエイジング・イン・プレイスを果たす地域密着型サービスの機能と課題」日本地域看護学会『日本地域看護学会誌』第17巻1号, pp23-31, 2014年7月
- 44・金圓景「認知症家族の自殺及び殺人事件に関する新聞記事分析」『保健社会研究(韓国)』34-2, pp219-246, (査読有), 2014年6月
- 45・*小松尾京子「主任介護支援専門員のスーパービジョン実践に関する研究—成長の要因と実践方法—」『ソーシャルワーク学会誌』第28号, pp1-11, (査読有), 2014年6月
- 46・*太谷京子「ソーシャルワークにおけるアセスメント—態度とスキル—」『日本福祉大学社会福祉論集』第130号, pp15-29, 2014年3月
- 47・*田中千枝子、原田正樹「社会福祉法人等における新規事業開発(法人マネジメント)—社会貢献の視点から考える」『第8回提携社会福祉法人サミット報告集2014』日本福祉大学社会福祉教育研究センター, pp119-140, 2014年2月
- 48・福山和女「精神療法の未来—ソーシャルワークの立場から」『精神療法』第40巻1号, pp106-107, 2014年2月

<図書>

図書名、著者名、出版社名、総ページ数、発行年(西暦)について記入してください(左記の項目が網羅されていれば、項目の順序を入れ替えても可)。また、現在から発表年次順に遡り、通し番号を付してください。

- 1・*田中千枝子「人材活用・養成教育におけるスーパービジョンとその枠組み」『相談業務のための社会福祉・保健医療のスーパービジョン』ミネルヴァ書房, 2017年3月
- 2・伊東秀幸、松本すみ子、中村和彦、青木聖久他「第1章 精神保健福祉士の専門性と養成教育」『精神保健福祉士の養成教育論—その展開と未来』中央法規出版, pp3-20, 総頁数270p
- 3・湯原悦子「介護殺人の予防—介護者支援の視点から」クレス出版, 総頁数261p, 2017年2月
- 4・坂野剛崇「犯罪学の研究法—事例研究」『犯罪心理学辞典』丸善, 総頁数896p, 2016年9月
- 5・*福山和女監訳、田中千枝子責任編集『ソーシャルワーク・スーパービジョン 第5版』A.カデュシン&D.ハークネス著, 日本福祉大学スーパービジョン研究センター発行, 中央法規出版, 総頁数659p, 2016年8月
- 6・*福山和女、田中千枝子責任編集『福祉・介護の支援人材養成・開発論—尊厳・自律・リーダーシップの原則—』勁草書房, 総頁数245p, 2016年7月
- 7・*汲田千賀子『認知症ケアのデリバリー—スーパービジョン—デンマークにおける導入と展開から—』中央法規出版, 総頁数246p, 2016年6月
- 8・*湯原悦子、再非行防止サポートセンター愛知『再非行防止社会内サポート CCNC study club 報告書 2015』再非行防止サポートセンター愛知&日本福祉大学スーパービジョン研究センター,

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

総頁数 122p, 2016年2月

- 9・*佐藤彰一「日本の成年後見制度の現状と変革の方向―意思決定支援へのパラダイム転換に向けて―」草野芳郎・岡孝編『高齢者支援の新たな枠組みを求めて』白峰社, pp255-278, 総頁数 189p, 2016年
- 10・*田中千枝子「コミュニケーションの基本」『権利擁護支援と法人後見』全国権利擁護支援ネットワーク編, ミネルヴァ書房, pp103-114, 総頁数 189p, 2015年12月
- 11・*福山和女「スーパービジョン」『スクールソーシャルワーク実践技術―認定社会福祉士・認定精神保健福祉士のための実習・演習テキスト』北大路書房, pp187-189, 総頁数 353p, 2015年12月
- 12・*佐藤彰一「権利擁護支援の基本」「意思決定支援と権利擁護」『権利擁護支援と法人貢献後見』ミネルヴァ書房, pp3-18・19-36, 総頁数 189p, 2015年12月
- 13・*上田晴男「社会福祉援助技術 I 対象者の理解」『権利擁護支援と法人貢献後見』ミネルヴァ書房, pp77-90, 総頁数 189p, 2015年12月
- 14・*野村豊子(日本社会福祉教育学校連盟監修)「序章・第3章」『ソーシャルワーク・スーパービジョン論』中央法規出版, pp3-41・119-156, 総頁数 605p, 2015年5月
- 15・*野村豊子(日本社会福祉士会)「スーパービジョンテキスト・特別寄稿」『日本社会福祉士会』pp78-87, 総頁数 101p, 2015年4月
- 16・照井孫久「6章3節 社会福祉法人」「7章1節 高齢者福祉」都築光一編著『福祉ライブラリ 現代の社会福祉』建帛社, 20p, 総頁数 237p, 2015年4月
- 17・*福山和女「事例分析方法」白澤政和・牧里毎治・宮城孝・福富昌城・岩田正美他編著『相談援助演習(MINERVA 社会福祉養成テキストブック)』ミネルヴァ書房, pp212-266, 総頁数 268p, 2015年3月
- 18・原田正樹『地域福祉の基盤づくり―推進主体の形成―』中央法規出版, 総頁数 244p, 2014年10月
- 19・原田正樹、岩間伸之、岩崎晋也『社会福祉研究のフロンティア』有斐閣, 総頁数 246p, 2014年10月
- 20・*照井孫久「支援者を育てる(スーパービジョン)」日本老年行動科学会監修『高齢者のこころとからだ事典』中央法規, 総頁数 626p, 2p, 2014年9月
- 21・金圓景「韓国の社会福祉館における事例管理: ウォルゲ総合社会福祉館の祖孫世帯事例を中心に」野口定久編『ソーシャルワーク事例研究の理論と実際; 個別援助から地域包括ケアシステムの構築へ』中央法規出版, 総頁数 361p, pp347-356, 2014年7月
- 22・福山和女・小原真知子監訳『統合的短期型ソーシャルワーク ―ISTTの理論と実践』金剛出版, 総頁数 296p, 2014年6月

<学会発表>

学会名、発表者名、発表標題名、開催地、発表年月(西暦)について記入してください(左記の項目が網羅されていれば、順序を入れ替えても可)。また、現在から発表年次順に遡り、通し番号を付してください。

- 1・鈴木敏文「介護福祉士のキャリア形成過程における実務の現状・変容に関する調査研究-キャリアニーズに基づく研修開発に向けて-」『日本介護福祉士学会大会』上田市(長野大学), 2016年9月
- 2・*野村豊子「認知症ケアにおけるスーパービジョン」『第17回日本認知症ケア学会大会』, 神戸市, 2016年6月
- 3・*野村豊子「認定社会福祉士制度におけるスーパービジョン」『第24回日本社会福祉士全国大会』, 松山市, 2016年6月
- 4・鈴木敏文、及川ゆりこ、吉田美夕紀、田中千枝子 他「認知症ケアにおける質的調査法を用いたスーパービジョン機能に関する記述的研究-介護行程に内在する「意識的・無意識的」行為の表

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

- 出化と共有化-」『第17回日本認知症ケア学会大会』, 神戸市, 2016年6月
- 5・小松尾京子、大谷京子、神林ミユキ、山口みほ「個人スーパービジョンにおけるスーパービジョンのスキルに関する研究-シュルマンによるスーパービジョンモデルとの比較-」『日本ソーシャルワーク学会第33回』京都府(同志社大学), 2016年7月10日
 - 6・山口みほ、小松尾京子、大谷京子、神林ミユキ「スーパービジョンの普及・定着化のためのシステム構築に関する研究-「尾張スーパービジョン研究会」の成立要件と活動効果の質的分析」『日本ソーシャルワーク学会第33回』京都府(同志社大学), 2016年7月10日
 - 7・金圓景「地域における要介護者の家族支援デリバリシステムの現状と課題: 老々介護世帯Aさんの事例を中心に」『第17回日本認知症ケア学会大会』, 神戸市, 2016年6月
 - 8・野尻紀恵、川島ゆり子「子どもの育ちを支えるソーシャルワーカーの学びあいプロセス(1)-CSWからとらえるSSWとの連携プロセス視覚化の試み-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第21回やまぐち大会』, 山口市(山口県立大学), 2015年11月15日
 - 9・野尻紀恵、川島ゆり子「子どもの育ちを支えるソーシャルワーカーの学びあいプロセス(2)-SSWとCSWの学び合いによる連携プロセス明確化の試み-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第21回やまぐち大会』, 山口市(山口県立大学), 2015年11月15日
 - 10・*小松尾京子、神林ミユキ、山口みほ、大谷京子「スーパービジョンにおけるスーパーバイザースキルの明確化の試み-スーパービジョン・セッションにおける逐語記録の分析から」『日本社会福祉学会第63回秋季大会』, 福岡県久留米市(久留米大学), 2015年9月20日
 - 11・金圓景「「介護」から「ケア」へ: 認知症者への「ケア」概念の検討」『日本社会福祉学会第63回秋季大会』, 福岡県久留米市(久留米大学), 2015年9月
 - 12・*小松尾京子「スーパーバイザーとしての成長に関する取り組み-主任介護支援専門員へのグループスーパービジョンを題材に-」『第23回日本社会福祉士会全国大会』, 金沢市, 2015年7月5日
 - 13・平野隆之「コミュニティ再生と地域包括ケアシステム-地域福祉にとってのPUSHとPULL」『日本地域福祉学会第29回全国大会(招待講演)』, 仙台市(東北福祉大学), 2015年6月20日
 - 14・野尻紀恵、川島ゆり子「地域を基盤とした福祉と教育の連携の可能性」『日本地域福祉学会第29回全国大会』, 仙台市(東北福祉大学), 2015年6月21日
 - 15・平野隆之「社会福祉をとらえる総合化の論点」『日本社会福祉学会第63回春季大会(招待講演)』, 東京都千代田区(法政大学), 2015年5月31日
 - 16・*引野好裕、汲田千賀子「ユニットリーダーが職員から受ける相談とその応答に関する実態調査」『第16回日本認知症ケア学会大会』, 札幌市, 2015年5月
 - 17・*浅野正嗣、山口みほ「保健・医療領域におけるソーシャルワーク・スーパービジョンの現状と課題(1)-スーパーバイザーが扱う内容とその困難」『日本社会福祉学会第62回秋季大会』, 東京都新宿区(早稲田大学), 2014年11月30日
 - 18・*山口みほ、浅野正嗣「保健・医療領域におけるソーシャルワーク・スーパービジョンの現状と課題(2)-スーパーバイザーに認識されたスーパービジョンの内容と成果」『日本社会福祉学会第62回秋季大会』, 東京都新宿区(早稲田大学), 2014年11月30日
 - 19・*大谷京子、田中和彦、寺澤法弘、吉田みゆき「アセスメントプロセスに活用するスキルの検討-クライアントの主観に焦点を絞って-」『日本社会福祉学会第62回大会』, 東京都新宿区(早稲田大学), 2014年11月30日
 - 20・*小松尾京子「実習指導者による実習スーパービジョンの課題-社会福祉士実習指導者講習会受講者の調査から-」『日本社会福祉教育学会第10回大会』, 鹿児島県霧島市, 2014年8月
 - 21・金圓景「異なる視点から寄り添うことで繋がる支援: 認知症の人と家族」『日本家族看護学会第21回大会』, 岡山市, 2014年8月
 - 22・*小松尾京子「成長を促す「スーパーバイザー体験」のための具体的方法論の模索-主任介護支援専門員とのグループスーパービジョンを題材に-」『第22回日本社会福祉士会全国大会』, 鹿児島市, 2014年7月

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

- 23・福山和女「超高齢化社会と家族支援」『家族研究・家族療法学会第31回大会』, 神戸市, 2014年7月
- 24・*大谷京子、田中和彦「ソーシャルワークアセスメントスキル—エキスパート面接ロールプレイからの抽出—」『日本ソーシャルワーク学会第31回大会』, 名古屋市(日本福祉大学), 2014年6月22日
- 24・野尻紀恵「災害時スクールソーシャルワークと地域の立ち上がり—甚大な水害被害に遭った学校の再開に向けた支援記録の検証—」『日本地域福祉学会第28回大会』, 松江市(島根大学), 2014年6月
- 25・*来島修志「介護スタッフに対する回想法指導教育の効果と課題—回想法リーダー自己チェックシートの活用—」『第15回日本認知症ケア学会大会』, 東京都千代田区, 2014年6月

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

ホームページで公開している場合には、URLを記載してください。

<既に実施しているもの>

1. 開設記念フォーラム・出版記念セミナー・スーパービジョン研究全体会の開催

1)「日本福祉大学 スーパービジョン研究センター・開設記念フォーラム」の開催 「重層的スーパービジョンのシステム構築をめざして」

<基調報告> 「スーパービジョン研究センターの研究方向とねらい」

田中 千枝子センター長(日本福祉大学 社会福祉学部 教授)

<シンポジウム> 「スーパービジョンの重層的な研究プロジェクトの進め方」

概念・研究枠組 田中 千枝子(社会福祉学部教授)

ソーシャルワーク 大谷 京子(社会福祉学部 准教授)

ソーシャルケア 野村 豊子(社会福祉学部 教授)

権利擁護支援 湯原 悦子(社会福祉学部 准教授)

法人マネジメント 山内 哲也(大学院 実務家教員)

コーディネーター 平野 隆之(社会福祉学部 教授)

<対談> 「スーパービジョン研究センターに期待するもの」

福山 和女(スーパービジョン研究センター 顧問)

平野 隆之(日本福祉大学 社会福祉学部 教授)

実施日時:2014年4月20日(日)・場所:日本福祉大学名古屋キャンパス

2)『「スーパービジョン イン ソーシャルワーク 第5版」翻訳出版記念セミナー』の開催

<基調講演> 「カデューシンのスーパービジョンを訳して」

福山 和女(スーパービジョン研究センター 顧問)

<報告> 「カデューシンのスーパービジョン 3機能を中心に」

管理運営的機能 田中 千枝子(社会福祉学部教授)

教育的機能 大谷 京子(社会福祉学部 准教授)

支持的機能 山口 みほ(社会福祉学部 教授)

<演習> 「カデューシンのスーパービジョンを体験する」

福山 和女(スーパービジョン研究センター 顧問)

実施日時:2017年3月26日(日)・場所:日本福祉大学名古屋キャンパス

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

3)「スーパービジョン研究全体会」の開催経緯

- ①スーパービジョン研究 4 月全体会 : 2014 年 4 月 2 日
- ②スーパービジョン研究 5 月全体会 : 2014 年 5 月 17 日
- ③スーパービジョン研究 6 月全体会 : 2014 年 6 月 12 日
- ④スーパービジョン研究 7 月全体会 : 2014 年 7 月 3 日
- ⑤スーパービジョン研究 11 月全体会 : 2014 年 11 月 27 日
- ⑥スーパービジョン研究 1 月全体会 : 2015 年 1 月 16 日
- ⑦スーパービジョン研究 4 月全体会 : 2015 年 4 月 16 日
- ⑧スーパービジョン研究 7 月全体会 : 2015 年 7 月 2 日
- ⑨スーパービジョン研究 9 月全体会 : 2015 年 9 月 17 日
- ⑩スーパービジョン研究 11 月全体会 : 2015 年 11 月 13 日
- ⑪スーパービジョン研究 2 月全体会 : 2016 年 2 月 10 日
- ⑫スーパービジョン研究 4 月全体会 : 2016 年 4 月 28 日
- ⑬スーパービジョン研究 9 月全体会 : 2016 年 9 月 29 日
- ⑭スーパービジョン研究 11 月全体会 : 2016 年 11 月 9 日
- ⑮スーパービジョン研究 12 月全体会 : 2016 年 12 月 14 日
- ⑯スーパービジョン研究 1 月全体会 : 2016 年 1 月 27 日

※スーパービジョン研究センターのホームページは次の URL です

: <http://www.n-fukushi.ac.jp/research/supervision/>

<これから実施する予定のもの>

14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付してください。

※ 論文や学会発表等になじまない研究である場合は、本欄を充実させること

1. 講演活動

- 1) 山口みほ、野田智子 「第 10 回日本福祉大学夏季大学院公開ゼミナール」
『体験的に学ぶスーパービジョン』
2014 年 7 月 27 日(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)
- 2) 福山和女、田中千枝子 「第 11 回日本福祉大学夏季大学院公開ゼミナール」
『FKスーパービジョンー家族システム論による事例解析ー』
2015 年 7 月 26 日(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)

2. DVD教材の作成

- 1)制作統括:山口みほ 監修・シナリオ協力・キャスト (講師):田中千枝子
タイトル:中堅・ベテラン MSW のための『面接技術』I ~自らの実践と後進指導の向上を目指して~
・使用研修会名:愛知県医療ソーシャルワーカー協会 2014 年度専門研修②
・制作:愛知県医療ソーシャルワーカー協会・日本福祉大学スーパービジョン研究センター
・制作年月:2014 年 11 月
- 2)制作統括:山口みほ 監修・シナリオ協力・キャスト (講師):田中千枝子
タイトル:中堅・ベテラン MSW のための『面接技術』II ~ソリューション・フォーカス・アプローチ

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

(SFA)を用いた意思決支援のための面接～

- ・使用研修会名:愛知県医療ソーシャルワーカー協会 2015 年度専門研修②
- ・制作:愛知県医療ソーシャルワーカー協会・日本福祉大学スーパービジョン研究センター
- ・制作年月:2016 年1月

3. 講義

- 1) 田中千枝子「日本福祉大学大学院公開講義:私の研究テーマと研究法」
『スーパービジョンの倫理的側面を考える』
2015 年 7 月 6 日(日本福祉大学名古屋キャンパ:愛知県名古屋市)

4. 研修会

- 1) 田中千枝子「愛知県医療ソーシャルワーカー協会専門研修」
(スーパービジョン研究センター共催)
『中堅・ベテラン MSW のための「面接技術 I」
～自らの実践と後進指導の向上を目指して～』
2014 年 12 月 13 日(愛知県産業労働センターウインクあいち:愛知県名古屋市)
2015 年 8 月 2 日(日本福祉大学名古屋キャンパ:愛知県名古屋市)
2015 年 9 月 27 日(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)
2016 年 6 月 26 日(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)
- 2) 田中千枝子「岡山市南地区自立支援協議会におけるスーパービジョン運営と
事例スーパービジョンの学習会」
2015 年 1 月・2 月 3 月・5 月・6 月・9 月・10 月・11 月の第 3 金曜日に実施
- 3) 山口みほ、野田智子「日本社会福祉士会基礎研修Ⅲ」
『スーパービジョン』
2015 年1月 11 日(愛知県)
- 4) 山口みほ「日本医療社会福祉協会医療ソーシャルワーカー基礎研修Ⅱ」
『ソーシャルワーカーのためのスーパービジョン』
2015 年 3 月 22 日(兵庫県)
- 5) 田中千枝子「実際のケア会議をスーパービジョンとして実施する研修会」
「ケア会議の本質」 2015 年 1 月(岡山市)
「ケア会議をスーパービジョンとして実施」 2015 年 2 月(岡山市)
「ケア会議で元気になる」 2015 年 3 月(宮崎市)
「ケア会議をスーパービジョンとして実施」 2015 年 3 月(大分市)
「ケア会議をスーパービジョンとして実施」 2015 年 10 月(富山市)
「ケア会議をスーパービジョンとして実施」 2015 年 10 月(福岡市)
「スーパービジョン研修」 2016 年 2 月(大分市)
- 6) 大谷京子「PSW 版スーパービジョン研究会」
2015 年 4 月～現在(毎月開催)(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)
- 7) 山口みほ「愛知県医療ソーシャルワーカー協会専門研修」(スーパービジョン研究センター共催)
「中堅・ベテラン MSW のための『面接技術Ⅱ』～ソリューション・フォーカス・アプローチ
(SFA)を用いた意思決支援のための面接～」
2015 年 1 月 31 日(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

2016年8月28日(日本福祉大学名古屋キャンパス:愛知県名古屋市)
 2017年1月28日(愛知県産業労働センターウインクあいち:愛知県名古屋市)

- 8) 山口みほ、小松尾京子「日本社会福祉士会基礎研修Ⅲ」
 『スーパービジョン』
 2016年1月17日(愛知県)
- 9) 山口みほ「日本医療社会福祉協会医療ソーシャルワーカー基礎研修Ⅱ」
 『ソーシャルワーカーのためのスーパービジョン』
 2016年3月21日(大阪府)
- 10) 山口みほ、小松尾京子「日本社会福祉士会基礎研修Ⅲスーパービジョン」
 『スーパービジョン』
 2016年1月17日(愛知県)
- 11) 小松尾京子「三重県主任介護支援専門員更新研修」
 『スーパービジョン』
 2016年5月～8月(三重県)
- 12) 小松尾京子「三重県介護支援専門員協会津支部研修会」
 『スーパービジョン』
 2016年9月16日(三重県)
- 13) 小松尾京子「認定社会福祉士認証・認定機構 更新スーパービジョン」
 『認定社会福祉士へのスーパービジョン』
 2017年2月25日、26日(大阪府)

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

研究全体に対して翻訳事業の位置づけがわかりにくい、テーマに明確さを欠いているとの指摘があった。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

日本の福祉・介護現場での支援人材に生じている新たな事態に対応するため、翻訳作業を通して Kadushin のSVをセンターメンバー間で学びあい、新たなSVの再定義や再理論化に向かう研究を組んでいくとする方針に変更はない。2ヶ月に1回開催してきた研究センター全体会では、翻訳事業の報告と内容検討、各領域グループ研究企画と研究報告を並行的に行なってきた。その結果 Kadushin のシステム論に基づくSV理論を勉強しながら、各グループの研究成果にそれを反映させることができた。研究の中間総括として出版した『福祉・介護の支援人材養成・開発論』には、翻訳と領域研究の成果をもとに、日本のヒューマンケアにおける新たなSV理論への提言を組み入れることができた。

またテーマにある重層性については、直接の支援者支援に関わるマイクロ研究とSV体制整備のメゾ研究を、新しいSVの定義と理論化に向かう中核をなす研究として見せたことで、より総合的普遍的な研究としてとらえることができる厚みのある研究実績を築いてきている。

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳							備 考
		法 人 負 担	私 学 助 成	共同研究機 関負担	受託 研究等	寄付金	その他()		
平成 二十 六年 度	施 設	0							
	装 置	0							
	設 備	0							
	研究費	8,149	4,264	3,885					
平成 二十 七年 度	施 設	0							
	装 置	0							
	設 備	0							
	研究費	5,848	3,393	2,455					
平成 二十 八年 度	施 設	0							
	装 置	0							
	設 備	0							
	研究費	3,721	1,057	2,664					
総 額	施 設	0	0	0	0	0	0	0	
	装 置	0	0	0	0	0	0	0	
	設 備	0	0	0	0	0	0	0	
	研究費	17,718	8,714	9,004	0	0	0	0	
総 計	17,718	8,714	9,004	0	0	0	0		

※ 3年目(または2年目)は予定額。

17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施 設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)

(千円)

施 設 の 名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
名古屋キャンパス 研究拠点	平成14 年度	476㎡	7部屋	研究会・会 議参加者 延5,680名 (36ヶ月)	86,793 千円	43,399 千円	文部科学 省:私立大 学学術研 究高度化 事業

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

476 m²

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)	}	}	}	h h h h h h h h h h h h			
(研究設備)							
(情報処理関係設備)							

該当なし

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 26 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	734	事務用品	734	事務用品等消耗品
光 熱 水 費	0		0	
通 信 運 搬 費	163	電話通話代、宅急便代	163	関連機関等への連絡、送付代
印 刷 製 本 費	14	研究資料印刷代	14	研究資料印刷代・封筒印刷代
旅 費 交 通 費	1,735	調査、打合せ旅費、講師交通費	1,735	研究調査旅費・研究発表旅費・関係機関打合せ
賃 借 料	98	機器リース・レンタル料	98	機器リース・レンタル料
報 酬・委 託 料	4,797	講師謝礼・翻訳経費	4,797	シンホ等講師謝礼・翻訳経費
会 議 費	194	セミナー等参加費・研究会等会議費	194	セミナー参加費・研究会時弁当代・お茶代
そ の 他	379	研究用資料・関係学会参加費	379	研究用資料費
計	8,114		8,114	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	36	研究補助	36	時給800円、年間時間数44.5時間、実人数2人
教育研究経費支出	0		0	
計	36		36	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	0		0	
図 書	0		0	
計	0		0	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	0			

年 度	平成 27 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	105	事務用品	105	事務用品等消耗品
光 熱 水 費	0		0	
通 信 運 搬 費	75	郵便代、宅急便代	75	関連機関等への連絡、送付代
印 刷 製 本 費	557	研究資料印刷代	557	研究資料印刷代・封筒印刷代
旅 費 交 通 費	1,296	調査、打合せ旅費、講師交通費	1,296	研究調査旅費・研究発表旅費・関係機関打合せ
賃 借 料	241	機器リース・研究会時施設使用料	241	機器リース・会場借用料
報 酬・委 託 料	2,630	講師謝礼・委託費用	2,630	講師謝礼・ヒテオ作成委託・研究委託等
会 議 費	179	研究会等会議費	179	研究会時弁当代・お茶代
そ の 他	730	研究用資料・関係学会参加費	730	研究用資料費・関連学会参加費
計	5,813		5,813	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	35	研究・研究会補助	35	時給820円、年間時間数43.5時間、実人数2人
教育研究経費支出				
計	35		35	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	0		0	
図 書	0		0	
計	0		0	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	0			

法人番号	231017
プロジェクト番号	S1491012

年 度	平成 28 年度		積 算 内 訳	
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
		教 育 研 究 経 費 支 出		
消耗品費	34	事務用品	34	事務用品等消耗品
光熱水費	0		0	
通信運搬費	136	郵便代、宅急便代	136	関連機関等への連絡、送付代
印刷製本費	145	研究資料印刷代	145	研究資料印刷代・封筒印刷代
旅費交通費	592	調査、打合せ旅費、講師交通費	592	研究調査旅費・研究発表旅費・関係機関打合せ
賃借料	92	機器リース・研究会時施設使用料	92	機器リース・会場借用料
報酬・委託料	2,159	講師謝礼・委託費用	2,159	講師謝礼・ヒアロ作成委託・研究委託等
会議費	109	研究会等会議費	109	研究会時弁当代・お茶代
その他	297	研究用資料・関係学会参加費	297	研究用資料費・関連学会参加費
計	3,564		3,564	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	157		60	時給1200円、年間時間数102時間 実人数2人
教育研究経費支出	0		0	
計	157		60	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	0		0	
図 書	0		0	
計	0		0	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	0			
ポスト・ドクター	0			
研究支援推進経費	0			
計	0			